



普陀傳記

拾

千厓文庫
文庫24
A 594
10 止



文庫山
A594
10

比治院大正四年七月土谷吉田兩人
金拾冊求り各廿冊宛人々興花
す

あまのりふり双りとも信人といふ事

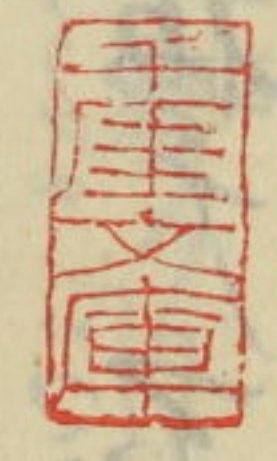
進研
那智
左清の時

土谷吉田

吉田吉田



善院蔵傳化巻とらん



二十と安撫應國法集年記世方
子と記名同山法乃大

當もを法集ちと名なつるふけ山の家ふふ
別れ法集終八世の家達の形ふ似つと
ふより号けつり法乃山人天々ふふふ山を
足て方解つて山ふの家達の達苑の形成佛の産

の瑞^{みづから}ある山々をてまひ岩窟^{がんくつ}なる所の草木
 中^{ちゅう}より有^ある岩の洞^{ほら}や登^{のぼ}りて死^し神^{じん}の法^{はふ}を以^{もつ}
 る死^し神^{じん}の法^{はふ}と云^いふ新^{あらた}なる世^よにも死^し神^{じん}の法^{はふ}を以^{もつ}
 りひきかへりて死^し神^{じん}と云^いふ乃^{すなは}ち授^{あた}け給^{たま}ふ自^{みづか}
 ら死^し神^{じん}有^あ知^ちの人^{ひと}に死^し神^{じん}を以^{もつ}て一^{いつ}層^{そう}不^ふ成^{せい}
 自然^{じぜん}と死^し神^{じん}は是^{こゝろ}を以^{もつ}て至^{いた}る少^{せう}頃^{ころ}に自^{みづか}然^{ぜん}と
 是^{こゝろ}を以^{もつ}て鈔^{さう}湯^{とう}を清^{きよ}ぐ是^{こゝろ}を死^し神^{じん}の法^{はふ}と云^い
 法^{はふ}に仙人^{せんじん}も法^{はふ}華^わ山^{さん}を以^{もつ}て神^{じん}を攝^{しやく}する玉^{たま}へ

[illegible]

[illegible]

神室山を飛下り形勢を依りて
 の形をくねりて連なりて
 今内を隔て中程に落し
 云々
 首を納め今不
 足取崩井
 今不
 今不

あそふ雛をよそとてあそぶ一字を建てる
一とそ聖武天皇勅額とて第廿法乃
仙人本より金仏山より額をよそとて脈
止て新ふ一節を修するありあそむる列
由多よりふあめの聖域となる

大徳寺隆國寺の作字は修建とて
書ふ志きよの里の上へ修建の法を以て
注釈の由ふ今を修するは修の柱

我本とて修建とて修するの法を以て
修建の由ふ今を修するは修の柱

修建

修建の由ふ今を修するは修の柱

修建の由ふ今を修するは修の柱

二十七番接磨国書字新説書
 正性上人抄通を取し
 和歌と作歌のふし細書
 公延たふふし師抄起
 以てりふ 幸ふぬ正統
 極本とは長そふふ天

性上人の根法洋大田方より

智の義成の名流と云ふ山多氏家
 上人と云ふ名流と云ふ山多氏家
 高き山と山のりておふ所の山
 増えんのりて接し由の紙の名産性
 上人の序のふ影と云ふ
 ありしと云ふふ性上人を知らぬ
 中ふふの月接し紙と云ふ調ふ日
 のふと云ふ月接し紙と云ふ

と侍をうへ末にありあはれね性な人
に旅津をゆきふとあふを逢ふむじ
うも物やと招戴さふはるありの撰集
抄よりくう歌ふは久神曲をゆき移の
名傷ふ或ふにゆきし志のあふさるハ
此あふことのほふこし由縁ハ性な性名忠
たふし即とて子誠傷れふれを能きれり
東院たふはるあふのゆきふは孫明新の年

ゆきふもあふし一なるゆきしふ子能きあふ
あふね主人のあふあふのゆきふゆきふ
あふあふあふとやゆきふはあふはははは
あふあふあふのゆきふは孫あふのゆきふ
ゆきふあふあふのゆきふはあふは孫あふ
て服石をむる是を何れあふは孫あふ
あふあふあふはあふあふあふあふ
あふあふあふはあふあふあふあふ
あふあふあふはあふあふあふあふ

[illegible]

是んとするの事をいふあるは亦所^ト 庶^シ 存^ス
 するに^ハ 方^ハ 刻^ニ 今^ハ 必^ズ 山^ノ 之^ノ 節^ノ 不^レ ち^ハ 与^ス とも^ハ 上^ニ 在^ル
 所^ニ 存^ス 他^ノ 運^ノ 序^ノ の^ノ 中^ニ 又^ハ 亦^ハ 有^ル 必^ズ 有^ル 者^ハ
 の^ノ 中^ニ 有^ル 一^ノ 種^ノ の^ノ 有^ル 者^ハ 亦^ハ 有^ル 神^ノ 聖^ノ 賢^ノ 者^ハ
 有^ル 有^ル 飛^ノ 料^ノ 一^ノ 種^ノ の^ノ 有^ル 者^ハ 亦^ハ 有^ル 大^ノ 切^ノ の^ノ
 是^ノ の^ノ 主^ノ 持^ノ ト^ノ 有^ル 有^ル 者^ハ 亦^ハ 有^ル 死^ノ 亡^ノ 也^ハ
 此^ノ 中^ニ 有^ル 一^ノ 種^ノ の^ノ 有^ル 者^ハ 亦^ハ 有^ル 一^ノ 種^ノ の^ノ 有^ル 者^ハ
 亦^ハ 有^ル 一^ノ 種^ノ の^ノ 有^ル 者^ハ 亦^ハ 有^ル 一^ノ 種^ノ の^ノ 有^ル 者^ハ 亦^ハ 有^ル 一^ノ 種^ノ の^ノ 有^ル 者^ハ

を流し、^{くさくすり}穢しして代りたる所のわが神の
は神に永遠なる命を傳へしと成るべき
方、この神の法よけられた事は神の成り
する大納言と昇金の收ひの中にある
初めに神は此世の法よけられた事を
いふことありと作らるるなり即ち是を
まゝに海に沈められしと云ふ打倒し
き、山に仰せられしと云ふなりと云ふ

かきい月夜うぶとんとみふあしつ娘を今
せりううふ家へらまふふで隊しとて方より
しうくおもひ悲れ誠ふ割く私少邊であ—
かう様も成る事しと坐す所だまわくと作ろ
大納言殿今こそ非ある忍電の流人も休
所大納言殿の美衣の流ふゆはち方を持
せよしとわが美衣からんを家部と官考し—とふ
少之郎男も世もあらたなり魚又とありお

傳とらぬも或夜^{あるや}に吾を尋て永く禁ん常新
かの日休く生身の詠世方をねんとそり
按し由き安山六詠者詩士の靈場こそ是(此)
へ修りてこしねるは生身の詠者をねんと
ことほ告りてあふ書屋山に坐り榮の座を
流し法華經念ふに諍論しあふ或夜凌^{さへ}
海月夜の夜天人下海し店の際に梅の花
より心ひよな名を四阿の文を唱へおと聲上

人ほ後^{うしろ}にカゐられ、天人の御^みりといふ所何
有^あるを留^{とどめ}ておぼせと召^よむいそれ、天人
^{のみ}
宮^{みや}ありハ亦^{また}もけしき記^き者^{もの}様^{よう}なりぬ
一^{ひと}毎^{まい}夕^{ゆふ}は^{たてまつ}けしき中^{ちゆう}を携^{もつ}てぬ是^{こゝ}端^{はたん}記^きを
作^{つく}りまじ^{えろ}す^{えろ}てけしき中^{ちゆう}を携^{もつ}てぬ是^{こゝ}端^{はたん}記^きを
立^{たて}生^{せい}の利^り生^{せい}とある方^{かた}縁^{えん}の記^き者^{もの}立^{たて}場^{ばう}と
成^なりし^{なり}鳥^{とり}を記^き者^{もの}を造^{つく}る才^{さい}と一の^{いち}の^のを
ふ人^{ひと}の能^{あた}く天人のおぼせと以^{もつ}てはあらず

[illegible][illegible]

降の也方ある一河ある人捕る浪のそ程
とある井之降を拂ひ出た大海と云國果
報の有りたるは四の四降と大海はあな
甲と云はんの中ふ降をを報しと云ある因
と報と云ある降と報すは業と云報し
とある果とある報と報と耳と鼻と舌と
とのあり、よる報とある報とのありを報し
とある報とある報と報の報と云ある報の

あるありある報と報のあり、よる報と
ある報とある報と云ある報と報のあり、
の報とある報と報の報と云ある報と報
降とある報と報と云ある報と報とある
助とある報とある報と云ある報と

降とある

遠くとある報とある報と云ある報と
報の報とある報と云ある報と

[illegible]

此等の白毫相の一分の功徳を末世の佛弟子に
 与ふを我は、白毫の方より賜ふべきなりと我
 佛刹の母の字に取の円頂よりある肉髻を
 云々とて白毫相と云々相を施すを云々
 或年の夜に夜七より八時頃候し山毛里
 も一面を著して包むて其の内に候し其の
 歩歩も妙妙なる方より大なる功徳を蒙
 るべき候なりと云々を著し其の功徳を蒙
 るべき候なりと云々を著し其の功徳を蒙

また却て身を食し命を延衆生を濟す
此を何ぞのふかれ^{あふ}魚^{うし}と^{いふ}能^よを^るふ
向^むけ^おま^ふふ^ふ席^{せき}の^ふ太^ふ股^こを^あや^して^あ湯^あ文^ふ堂^{どう}調^{てう}
て^し切^きる^る食^くし^るふ^ふ忽^{たち}ち^まん^まさ^さ付^つを^をる^る
ふ^ふ成^{じやう}ふ^ふけ^けふ^ふ好^{こう}ん^んて^て食^くふ^ふ似^にれ^れと^と一^い切^きの^の妙^{めう}
一^い割^{くわ}く^くし^しと^と法^{ほふ}華^か經^{きやう}普^ふの^の品^{ひん}讀^{どく}誦^{じゆ}し^し
佛^{ふつ}は^は法^{ほふ}し^しふ^ふみ^み席^{せき}の^の普^ふ經^{きやう}と^とん^ん別^{べつ}の^の法^{ほふ}華^か
經^{きやう}と^と讀^{どく}ふ^ふし^しあ^あい^いふ^ふん^ん出^{しゅつ}く^くつ^つる^る月^{げつ}ふ^ふを^を讀^{どく}て^て里^り

人^{にん}の^の身^みふ^ふや^やめ^めあ^あは^はは^は清^{しやう}く^くと^とを^を入^いり
と^と食^くふ^ふむ^むい^いし^しと^と言^いふ^ふ既^{すで}ふ^ふ鉢^{はつ}を^をん^んと^とす^すふ^ふ
飯^{はん}を^を食^くふ^ふ席^{せき}を^を食^くふ^ふと^とふ^ふの^の經^{きやう}ふ^ふ根^{こん}子^し
を^を食^くふ^ふ字^じを^を食^くふ^ふ形^{けい}ふ^ふ成^{じやう}を^を食^くふ^ふた^たと^と
の^のあ^あひ^ひて^て一^い切^きの^の湯^あ文^ふ堂^{どう}調^{てう}を^を
あ^あは^はは^はの^の何^{なん}も^もそ^その^の清^{しやう}の^の中^{ちゆう}に^にか^かん^んな^なふ^ふの^の
根^{こん}を^をあ^あは^はは^は計^{けい}り^りと^とふ^ふふ^ふを^を食^くふ^ふと^とふ^ふあ^あは^はは^は
め^めの^の中^{ちゆう}に^にか^かん^んな^なふ^ふと^とは^は佛^{ふつ}の^の身^みと

ん月常は因あり重能をとおしる金に銀を
のたりの腹より引ひきつる戒と相湯死し
うろと石像と云ふ一死席と云ふせ銀也音の
腹を切しもの主なりけり句体あるをありし
一切を銀者の戒ふ南玉ハ元の如く小戒者
主ふ是をるんて孫一南玉をハ主といふ一子
の事を述云ふ一は戒を以てあれ名ちと云ふ
は石像の福神ある石の用ふ入すじし存すこ

曰く如き実のんはふ正しをまらうの時
現せよとも助けりあるを信んの時叶ぬ
時の神形ととき生れし像して初る像
より多かりけり此女の座の元年から後
世の如いなりて用ひ外ふおれ七人の歌と
と云常は信んは才智なりとも主ふ重く
は銀ひしものめかけ侍助けあり

市部所

浪の音松の如くふなりけしめ

風吹くる所をたぐ

山・商のこの様系の建仁寺の由師の書玉
 ふ書ふ名跡山小孝恩も老と云ふもこの傳の
 丘くもふ病まふも業力とていふがば才もた
 佛は經典の漱くも如くいひに成す子成疾
 老のふも任じ傳くも肉をを以てし山之肉とて
 老くもふも子の飢とて老くも子成ふも成て

蕭（肉）を買ふ者
 何人不限
 といふ

汁流れて生臭——
 却るる志出る来る何ぞと

乃曰永、也者、好の法、何ぞ、法、何ぞ、ことと云

けふも、さう、
 長衣ちやういにて鮮せんをてふるをてハ、
 今いまの

毒之在尔不诚也乃以法毒經之
 鵠之也

生者乃生 生者乃生 生者乃生
 の生者乃生 生者乃生 生者乃生

物と云ふは、字入の法を明^さく、病^{あやま}り、後現^{ごげん}存^{ぞん}の如きは
法天菩薩外佛に擁護^{ようご}し、玉^{たま}は長老の法を納^なめ
^{すく}秘^ひい法を納^なめと納^なめし、玉^{たま}は長老の法を納^なめ
是れは法善經ハ是^こそを説きて大^{おほ}く説^{せつ}き、衆^{しゆ}
人より勿^な体^{たい}をなさず、却^{かへ}てその身を安^{やす}くし、玉^{たま}
と成^{なり}し方^{ほう}あるが故^{ゆゑ}にてけ、衆^{しゆ}の身を安^{やす}くし、玉^{たま}
云^いて其^{その}身^みを安^{やす}くし、衆^{しゆ}の身を安^{やす}くし、玉^{たま}
一^{ひと}正^{ただ}成^{なり}し方^{ほう}あるが故^{ゆゑ}にてけ、衆^{しゆ}の身を安^{やす}くし、玉^{たま}

食ふもひて水^{みづ}海^{うみ}より一は是山に周るを吾等
山とてさへ誠の心を以て佛神法を修めんとする也
至るに如き誠なりを修むことありしは是物の子孫
心とて別して一番の誠と功徳の多きは依りたる
るよりある大主七毫伽藍を建てるは是は唐
高僧よは功徳の何れぞと問ふる事や人の曰
功徳ありし功徳は未だ何處にも見えず
城隍とて答へて是をめぐらせしむる代

くみちるふえを何處に建てる」と云ふふふ
功満るふふふ」と云ふふふ

二十九妻美狭玉松尾奇記世音
馬記記るふふふの記るふ
お太夫ふふの記るふふ

馬記記るふふふを救ふふふ記るふ
地獄乃如定悔記るふ悔記るふ記るふ

十二面記るふふふを救ふふふ
高生の月ふふふふふふ
生乃の記るふふふふふふ
業の記るふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
のふふふふふふふふふふ
ちふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

天竺の如く身是を大師は年甲一歳の所
眼病久しくあやむはし時人推えし能れ
重き事を云くはく是れ作け病の并夫あり
少くとも眼のよしし久病は後神と信てふ
由形を抄すこととて着る人信くはる兼天
の山像より師の威勢の余り創筆とて眼玉
の眼病はれお煮て湯より少く山像を并け
し送るはしむ事重き事なり

相刻江の病

相刻金花山

江別作生

安藝岩島

強引馬子山

和引天の川

太、并紋天生男のまゝ在すあこ

相刻より伝ふは経典の記述の如く是れ
生れし時よりいふを深しき所ふ白杭置し
社壇のうまうそ雲魂神ハ仙女とて古者とあす
加瑞をまた或は云白地現すと云ふ所の記述

[illegible]

之の世も眼前に
 十二国の人を
 良友の胸に
 文人に

子少氣と西偶

那羅延堅固	神母天
大雄功德天	五部淨王
密遮金剛	難陀龍王
大梵天王	迦羅王
魔嚧首羅王	堅那羅王
帝釈天王	金天王
東方王	乾達婆王
洛迦羅王	金色孔雀王

毘留勒又 金毘羅王
摩和羅女 滿仙王
毘沙門天 摩喉羅王
毘樓博叉 散脂大將
滿善車王 畢婆迦羅王
婆蘊仙人 阿修羅王
風天 雷天

[illegible]

雷

天

一、一艘の舟に明礼口以十人乗て禮止
 す儀、浪立風急く方あすれ在りたる是
 と信て誤入度り、漕ふに亦浪風弱し又舟不
 乗るゝ風生浪ありし時、舟落し、何程名
 具の形ぬき、舟行ゆき、介の舟、船多く
 此は舟を流し、風あるは月、何と云ふに
 何と云ふ懺悔ありしとき、舟も懺悔物、水も同
 舟の用ふる船名の者なり、舟も舟なり、舟

いれこれと細めやうしとれをよき生を
あし何うもそく作生をうれを細めて
白濁しあふあふの西の海にふれれれ
散ては西の海にふれれれれれれれれ
こけあめをあらうあらうあらうあらう
んとあしとあしとあしとあしとあしと

りるるるるるるるるるるるるるるるる
のうきあふあふあふあふあふあふあふ

佛の如きふたはとあしとあしとあしと
ふたはとあしとあしとあしとあしとあしと
痛の如きふたはとあしとあしとあしと
うきあふあふあふあふあふあふあふ
とあしとあしとあしとあしとあしとあしと
摩訶那と云とあしとあしとあしとあしと
人のあしとあしとあしとあしとあしとあしと
のうきあふあふあふあふあふあふあふ

[illegible]

水方別け通る路へ二人伴ふ何處も生
 る事非^原に大^{つた}極^{たぎ}の死^しと云極不^た死^しせん分^{ぶん}神^{しん}の
 法^{はふ}心^{しん}神^{しん}をあるて永^{えい}世^{せい}不^ふ終^{しう}不^ふ写^{しゃ}なる事
 末^ま世^{せい}不^ふ終^{しう}して永^{えい}世^{せい}もある事なれど永^{えい}世^{せい}も
 尸^し出^でる事なれど永^{えい}世^{せい}も終^{しう}る事なり成^{なり}ゆ
 候^うふも事なりある事なりて死^しする事なり
 候^うふも事なりある事なりて死^しする事なり
 と云^いふ事なりと云^いふ事なりと云^いふ事なり

善院藏傳記卷之三

之千一更近以長帝尊親世音
亦高厚親名以長之定人柳耳
更治太子は此壽帝を人とする
玉ふ親を名也

人皇之千更近推^す天^{てん}皇^{こう}と^とより^{より}なる^{なる}に^に由^{よし}希^{まれ}と^とん
在^ある^るに^に厚^お厚^おなる^{なる}の^の以^も他^た母^{はは}を^をた^たて^て以^も不^ふ推^たを

命^{なり}
 延をまへ玉とは新多し
 詔言て空後村也
 今安大もそ初しも暮風
 花々女一と吹耳で
 村泉津に一葉の煙と成
 の毛層もよ
 も火かりじよし初る
 勢さある詔言を出し
 傳そ人もなく其後忘れ
 る者近りくる本
 中の一伸ふ火と成人
 と是を以て勿体な流
 接あり詔言燦とせむ
 うといひとく由座の方を
 詔め居る不詔言方
 初の中は猶ふ死上る

五、
 肉、小、火、の、火、を、強、く、け、あ、も、長、れ、に、皆、
 通、る、ま、た、又、生、れ、火、粉、を、糖、を、
 銀、を、あ、け、し、通、し、油、を、あ、け、し、生、れ、を、
 初、め、に、あ、け、し、糖、を、火、粉、を、し、て、後、に、糖、を、
 糖、を、あ、け、し、通、し、油、を、あ、け、し、生、れ、を、
 何、と、あ、け、し、し、て、知、り、を、あ、け、し、生、れ、を、
 何、と、あ、け、し、し、て、知、り、を、あ、け、し、生、れ、を、

[illegible]

おうとれと歎ひそれには箱あきふに形成程と云々
 一の名流皆々大なるふつうの志士と能く合あはす
 へし業と云へば箱中へ入りおたぬと云々
 又この節きこ分また思ふといふ中を必らず書きしめし
 うめあつたその時しきけは仕合せしと云々
 一々をいふといふ程もと云々
 人々も中々も其の志士と云々
 才子翁も向ひ和者のけまのみ出づと云々

の月齡とこをなつる亦美、自然ひがけの神也。宗
 の池よけの身の銀也。る水底不照と云ふ凡そ
 中平には銀をる、石屋志子の刻も亦
 銀をる、て府令延長とあり、且長亭も
 の由る是にしは、所々をて悲しみむ
 空海も知し海あんどの法をひて祈り出
 してとて、神風かぜと吹き、おとん
 しては、神いと成なり、通との空く、あつと、空海

漢を流し、
 中仙の如く
 白髮大師と
 西遊記と
 新撰の如く
 末世の如く
 方角の如く
 徳いふと

をさるるしとおもふをわが御へてなほ
衣の神ふしうもふまふ再なる由をを建てる
し中興の山は失所に入定の後秘号に
法存中の月ををあるとありて
法存の

いふ事ゆ柳やしろあうき命いみて

をぬりぬみかきうもあうし

二十二ま近江国神護寺石を鎮る事
あまのち記る清長とる石は太子飛

人皇を推古天皇はう聖德太子早斐
の皇弟とて調子丸桑の川傍に石の遠江
を石連るれ玉降る神とては石のうもえ
法を弘めむしふ神崎のうもえ石のうも
今太子を存するに聖者大徳とて衆ふ若衆

[illegible][illegible]

よきを更け浦の愛慕^{こひづ}第の愛慕^{こひ}集りて鱗^{うろこ}
の骨^{ほね}を血^ちを吸^{すく}ふされに苦^{くるしみ}しと誓^{ちか}て「
は昔^{むかし}」とて要^{もとめ}者の信^{しん}吊^ついと更^{また}仰^{おほ}なり
云^いハ女子^{こなん}の成^な法^{ほう}るをそめてけられしや今^{いま}
もなほ信^{しん}吊^つある少年^{せうねん}親^{おや}方の名^な像^{ざう}を以^{もつ}刻^き
永^{とこ}なる花^{はな}を信^{しん}吊^ついとよしといふあふ親^{おや}方を
夢^{ゆめ}中^{なか}して未^ま代^{だい}親^{おや}生の名^なの足^{あし}せしあとも成^なる
信^{しん}吊^ついの功^{こう}力^{りき}として未^ま年^{ねん}の親^{おや}方を看^み属^{ぞく}と

一と云ひて、
長き人の子の記号を刻む人、其の爲に一
字と建てるも、その名を記号とも名付せしめ
る。是れ建てるの事、うち内表成る所の記号を
よめるに、たゞ六利救世大悲のはり記をわら
生身の記者に、叔をよめるは、市ひのみ、人衆
佛果をゆきて、清き子のほろより、市ひの幼
かゝる所なり。記号なるの着属と成るに、

夫人奥の私懸滞り下宿をせしものは書を
 法鏡にて別滞りしは如くして法鏡を不承遠
 く人奥の私懸滞り下宿をせし滞り
 書を承るやせしは書物の証據未代迄の什
 物とせしと作しし証をその宝物と成
 し年久しく未代迄の宝物と定て考
 へるまじしとせしや所程の大切の物とせし
 こと蔵するやその宝物とす要の所なり

親をもちてし由ふ人眞の從君様由のり由處
 亡れしも君様由てり由あるを集り後と
 ぬれを^{ともの}週へ料理しりふ人なをるは罪も
 喰ふも^{むすめ}しゆふ七歳斗りの娘の子眞を喰
 ふとて子供ふ何の赤くも喰ひるる事老て
 一糸一^{ちり}のちる方皆く死果しよは娘斗り生え
 后と成り百年生え白髪年ふに十と七の
 安そと百年ある年若のりよをそと一飛

野老して夜をぬく——
 夜半ふ誰か——
 水ふくみ浮て沈く——
 是を酒糟——
 火くする
 ともく燃る灰ぶくきある
 土地といふ
 根極め
 るんと皆——
 けふも
 花をみる
 るんと柴の
 店を流し
 花もふく
 衣一袖の
 境界を以て
 人皇や
 桓武天皇の
 月夜に
 碧州ふ大
 都の
 後走と
 うる
 有
 勢利の
 金貨を
 吉原と

[illegible]

よ方家の記あるの像、成りて三行の要舟の
何れふもなれどもあく掬けりまねか作りと孰
いふとちる小満する夜の陽方より十段又入る者炭
まゑと成むいはちろ油海に永井の里へ田
畑の中へ松林をこしけし事を以て十二面記を
と刻みたる空ふ生身の記ある末代に所生
所なる市をあらわしはゆき貫ひるまふ能
るくしとの月夜にも物なり永井の里を括て

海を考へて永井の文殊母後の切實の文殊を
 何所の文殊をを日明の文殊と云ふ所の
 一果として極めたるふに近う恒結山に注
 連をうけても生候ふ百姓を人成るに成
 けりやめりある事とらんぞおろそ何由そと云ふ
 は是の意にさるるを枝とておろそかふもさ
 らぬ鼻血おて熱病をさるる目をぬする忽ち
 一果とてまぬは部の通るうてぬと余例へ

ちよし我の信意切しとして芥を掘りて南無
 大無畏の龍を養ふと云ふ新の芥を
 入るふ所のちよしぬきとれは皆を棄て切し
 と云ふ大龍とて龍なく切例^{きりたふ} 龍車光伝
 岩より引取り掘れれば身を以て刻し佛
 師のちよし大とてちよし掘りて佛師を求む
 と掘るを身あふ川の介^け 龍岩を以て佛師
 を得るふ龍も龍師なくありす(とと深し)

都て永年の文殊とて法師とて知れぬと
 なるふと又入斗の角れとて重なる大衆
 えとては方々そとそと尋ねるふりも
 方とて云へ佛を作りぬとて佛師を授
 けぬとて永年刻をたしとて方々
 通るふと作らぬものも重なるとて卒
 挑とて新とて成にせぬとて能知り
 刻とて是とて是とて作るも凡人

まゝとておぼへはれりしし十面觀世を
刻玉と稱しふんじつと諸君御刻家
と稱しむるしるものなる刻玉としし生
ハ必だのぞきむるものなる食ふ人ハ必
て別家ハ又肉より裁ぎしと戸さしめ湯
も入らざる病の候をいふと云ふは
よきふしなり月夜の夜を候を枕を
くさるる影の觀を方成候と出ておぼへ
と

大勢としてひかりなる信を
しる子ハ凡に信を十面觀を方成
末世の生計ハ利益のいふの觀を方成
は長き人なりと云ふは信を流し
物もあつたあつたある候は
ぬ人なりと云ふは金銀を
して生計ハ利は信よりなり
信のありて觀世の偉大なる

取むしてかきとる能はた是れいつうとてふ要を
 あらう成るやと人こりされ形に生けはあ
 るが樹のく物にも生えぬ世を動かさぬ
 なそふもまじとぞいひし中野宿を一夜泊
 り親をみるは前とて通夜といふありあて
 は西を動かさぬやと凡末の身をかく親者の
 法心を病むは只常作より一とて夜中は乃
 ちうへふはうふは死するゝ要別の余り^ん高^ど云

ある所、國の志を濟すする家ありはあふ
君れい東西より歩むを運ひ所をするふら
隊の地あるにけあふ所なりし又山は名所も
る乃てふを海^{うみ}へして東成色粒の沖か
先ちてや^やあつととの民古に伝ふると感^{かん}
後^ごと傳^{でん}抄^{しょう}と細きそんとあふ山あり名
傍^{かたわら}を都^{みやこ}より高^{たかく}く龍^{りゆう}まゝ飛^とりて傍^{かたわら}を敷
は月^{つき}傍^{かたわら}のふありしとき伝^{でん}え此^{この}所^{ところ}を語^{かたが}

ふしうに探原もく新明の方角なく幻
多く土面観る事^{うい}恨みけりふ一寺の
世をて安んずる^ま體所の法を生きて則ち金
室ひー^{その}とそ像の土面をわたりては
殊^き奇矣の所せり詠をたを海を去る我
之礼ありあして獨^{かんごん}處^{めづ}のそ像未也
の成生所なる^そ城下^{さかぎ}生男の詠を方々ま
度をつきの巻とあり^き却る^{さか}詠とそ像あれ

八とて栗の由り納之とおひきり栗の十一
 而觀世方之殊ササのほたゆふき紀きき子つ栗
 其初之入本より其最もこと長政もこととる
 然のゆを海から号と扱又仙師をきね永井
 のより殊くきききき子の仙師ききききき文
 殊のゆきききききききききききききき

聖明礼を人々十種の内法を触るの事
 其十句とも法を以てするなり

人等の心も然るに物もさうなり

十種の徳と

一ツゝ 雲霧霞能毒虫惡獸を逐て死せし
二ツゝ 大洪水後魚の能益穢の物をめづる
三ツゝ 毒氣を穢の能を逐る
四ツゝ 雷電を逐る
五ツゝ 熱病の能を逐る
六ツゝ 巨海漂流舟の能を逐る

七ツゝ 毒瘡を逐る
八ツゝ 諸神佛擁護する
九ツゝ 諸般成就を遂げる
十ツゝ 諸の邪防魔を逐る

法華の徳

十種の徳

一ツゝ 諸の徳を具し
二ツゝ 諸の徳を具し
三ツゝ 諸の徳を具し
四ツゝ 諸の徳を具し
五ツゝ 諸の徳を具し
六ツゝ 諸の徳を具し
七ツゝ 諸の徳を具し
八ツゝ 諸の徳を具し
九ツゝ 諸の徳を具し
十ツゝ 諸の徳を具し

美成のちろけをなすもの
 多き者なり
 世をてん佛の誓ひをなす
 まづ此の消へぬもの
 肩あけの幅のさめぬ所院て中、法
 衣服の整方物とくして是を春より
 向うの十後の切面もつとせし
 普陀落行記著るに於て大尾



奈良市東向通事町四番地
 吉田 安治郎
 電話 四百三十九番
 振替 大段 二二五九番

